平成２５年度「重点研究費」研究成果報告書

研究課題	幼児期における片づけ行動の人間工学的研究―幼児期における「片づけ」を促す収納用具開発を目的として―

研究代表者

氏名　太田　朋宏	所属　芸術・スポーツ科学系　美術・書道講座	職名　教　授

研究分担者

氏名　鳴海　多恵子	所属　附属幼稚園小金井園舎	職名　園　長
ユン・ゴウン	東京韓国学校	講師（非常勤）

【研究成果の概要】　（文字の大きさ９ポイント・字数 800 字～1600 字程度）

１．絵本の収納と整理に関する研究

9 月 10 月に本棚の試作品を２台制作し、11 月から１月にかけて先年制作の１台と合わせて協力家庭にて最初の試験的な使用実験を行った。協力家庭は想定年齢の幼児のいる学生の親族１軒と最初にアンケート調査協力をしていただいた家庭３軒の４軒。方法は幼児の使用状況を撮影し映像を分析した。

初めの設定は幼児が遊びの中で本棚から本を出したり片づけたりする様子を室の反対側に設置したビデオカメラで人を介さずに１時間撮影し、その中から自然な行動での使われ方を観察する予定であった。しかし４軒とはいえ生活状況は様々で幼児の行動も一様ではなく思うようには撮影できず、結局殆どのケースで後日家族の方にカメラを回してもらい、ピンポイントで使用時の撮影をしてもらうこととなった。親の指示で本を出したり片づけたりした点では恣意的な性格が残った。

結果として判明したことはそれでも先ず本棚としてはそれなりに設計意図に近い使われ方をしてくれていたこと。中でも１冊１冊取り出しては読み終えて順次棚に戻すのではなく、数冊を次々と引き出しては読み広げ最後にまとめて片づけるような幼児に良くみられる行動の際には、数冊重ねて棚に戻せる本器のような平積み式の本棚は片づけやすいのではないかという撮影してくれた親からの意見は心強いものであった。

次に棚板の支持強度が不十分であることが判った。本のみであれば容量一杯積んでも十分耐えていたが、出し入れで力が加わることや棚板に足や手を掛けるなど体重を加えていたケースもあり、回収後のチェックでは数か所の棚板が取れかかっていた。また形状に対する意見は概ね好評であったが、これは親の感想である。

今回の下実験で判明したことは時間をかけての実際の生活の中での使用状況の記録・観察と多少の恣意性は生ずるものの条件を設定しての実験の双方が必要だということであった。後者の例としては通常の立て並べの収納との比較検証などが考えられる。

２．玩具の収納と整理に関する研究

玩具等の片づけのための基礎データ収集については当初幼児が扱える寸法と重量の測定を考えていたが、本棚の調査の協力家庭でこちらについても聞き取りを行ったところ、片づけの対象となっている玩具の種類や収納の様態をより具体的に把握して対象とすべき問題点を絞ってある程度明確にしてからでないと有意義なものが得られないことが判明した。予期していたことではあったが具体的な数字を出すことに焦った感もあり、現在これまでに得られた記録を基に調査方法を再検討中である。

本年度は前半前任の佐賀大学に新設された美術館へ提供依頼があった資料の作成や出品作品の制作業務が急に入ったことと連合大学院担当資格審査等で忙殺されて殆ど本研究を進めることが出来ず、実際に取り掛かれたのは秋以降であった。そのため出来たことも予備実験の域を出ないものであった。さいわい付けて頂いた予算をもとに大方の設備は整ったので 26 年度の新しい研究室メンバーを加えて 25 年度思う様に進められなかった分を継続して行う所存である。

研究成果発表方法

［発表論文名（口頭発表を含む），氏名，学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入する。］

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。
なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。

得られた結果は決して十分なものではないが、過去に口頭発表した内容やこれまでの経過をまとめたものを日本デザイン学会誌および大学美術教育学会誌へ投稿すべく執筆・準備中